



▲立神岩の装飾が施された軍配。東京後援会から贈呈されたもの



▲山崎さん直筆による「精神一到」の文字



▲九州場所初日結びの一番、横綱白鵬対豊真将。木村庄之助としての初さばき(田野尻秀明さん提供)



▲神園征市長が山崎敏廣さんに市民栄誉賞を授与する。右はキミ子夫人

36代木村庄之助 山崎敏廣さんに 市民栄誉賞

山崎敏廣さん(山手町出身)が昨年11月、大相撲行司の最高位である立行司36代木村庄之助を襲名しました。このことが本市の名譽を高め、市民に大きな希望と自信と活力を与えたことから、枕崎市民栄誉賞を授与しました。

36代木村庄之助襲名祝賀会が2月18日、市内のホテルで開かれ、その中で市民栄誉賞の授与と記念品(薩摩切子の花瓶)の贈呈が行われました。祝賀会には約300人の関係者が出席し、山崎さんの功績をたたえ、栄えある受賞を祝しました。

山崎さんは、昭和39年に枕崎中学校を卒業後すぐに井筒部屋に入門し、26代木村庄之助に弟子入りしました。同年5月に式守敏廣として初土俵を踏み、昭和60年に十両格に、平成20年には38代式守伊之助に昇格。そして昨年の11

月に大相撲行司の最高位である36代木村庄之助を襲名しました。また、平成12年1月場所から平成19年9月場所まで、戦後6人目となる番付の書き手主任を務めるなど活躍してきました。

— 枕崎市民栄誉賞 —

■芸術、文化、体育などの分野において優れた成果をあげ、枕崎市民に大きな希望と自信と活力を与え、その功績が顕著と認められる個人に贈られます。本市初の市民栄誉賞は、女性初のヨット単独無寄港世界一周に成功した今給黎教子さん(平成4年)で、今回二人目の受賞となります。

「道」を極めるといふのはどんな職業でも一緒。大それたことをしたわけじゃないですよ。これまでやってこれたのも、郷土の方々の応援のおかげです」と謙虚に語る山崎さん。そんな山崎さんですが、角界入りは本意ではなかったと言います。「警察官に憧れていましたね、本当は警察学校に行きたかったんですよ。当時中学3年生、折口町にあったバーのマスターで井筒部屋出身の元力士から鶴ヶ嶺に会わせてあげる」と言われ、12月に地方巡業の観戦へ。しかし、そのとき会ったのは後の師匠となる26代木村庄之助でした。「実は行司の面接だったとあとから聞かされました。だまされましたね」と苦笑する山崎さん。年が明けて1月15日、同級生より一足早く卒業した山崎さんは、親戚や同級生をはじめ、たくさんの方に盛大に見送られ、枕崎駅前から車で3日かけて上京しました。

▼行司の世界は想像を超える厳しいものだったと言います。「若いときは、このまま行司をやっていたらいいのだから

「精神一到」 努力すれば夢はかなう

INTERVIEW

かと思つたこともありましたが、ある日、もう辞めようと思つて枕崎に帰り、いつも相談していた小湊香一さん(枕崎後援会幹事長)に話をしたら『誰だって最初は苦労する。苦労して現在がある。ここまで頑張ってきたんだからもう少しきばれ。道は開ける』と諭されました。このことと吹っ切れました。その後『先輩の仕事に早く追いつけ、先輩には絶対抜かれないぞ』という気持ちでやってきました。

今後については「行司の後輩たちのためにも、地位の継承をしっかりしていきたいです。また、36代はあいう行司だったと皆さんの記憶に残るような行司になりたいですね」と話していました。



36代木村庄之助
山崎敏廣 (やまさき・としひろ)

昭和23年生まれ、山手町出身。東京都在住。趣味は釣り。「故郷からカツオやつけあげ、焼酎を送ってもらい、だれやめをするのを楽しみにしています。枕崎の甘い醤油は欠かせません」と故郷の味を力に軍配を振るう。



▲市相撲連盟の楠一郎理事長による万歳三唱の音頭



▲山崎さんの同級生による卒業式での会話は大盛り上がり



▲相撲甚句を披露する枕崎後援会の小湊香一幹事長



▲軍配に装飾された立神岩などの説明をする山崎さん



▲本市出身の画家、森一浩さんから肖像画が贈呈されました。



▲枕崎後援会の市田一郎会長のあいさつ



▲約300人の関係者が集まり、襲名を祝いました。

36代木村庄之助
襲名祝賀会
フォトスナップ